

「文章表現Ⅰ」における 授業内容定着をめざす試みの実践報告

岡村 裕美, 辻野あらと

1. はじめに

人文学部において、「文章表現Ⅰ・Ⅱ」（2006年度まで「文章表現の方法Ⅰ・Ⅱ」）は、1年次生の履修必修科目として2003年度より導入された。前期「文章表現Ⅰ」はテキスト『日本語を書くトレーニング』（野田尚史ほか2003）を使用し、学生が広く「文章を書く力」を身につけることをめざしている。現在7名の非常勤講師が担当しており、各回の授業の流れは「導入→目標の説明→グループワーク→プレゼンテーション」とすることを共通としている。後期はアカデミック・ライティングの指導が中心となる。

2010年度は授業開始から8年目となり、少人数クラスの指導における問題点、学生の基礎的国語力の低下など、さまざまな課題が明らかになりつつある。そのような中で、本稿で着目するのは「授業内容の定着」である。前期の授業を後期のアカデミック・ライティングの授業に関連づけて指導することも含め、授業で学んだことを能力として定着させ、日常生活や大学生活で生かしてこそ授業の意味があると考えためである。

「文章表現」を担当する講師は、授業に対してそれぞれが工夫をこらしているが、本稿では2名の講師による定着のための試みについて報告する。内容は、前期の授業の流れと授業において重視したことと、4月と7月にそれぞれのクラスで実施した「作文テスト」を分析した結果を分析したものである。なお、この作文テストの評価には、野田ほか（2008）で示された評価基準を用いている。

2. 実践報告（1）担当講師：岡村裕美

2.1 授業の重視点とその意図

以下、授業の流れと、授業内容を定着させるために重視したことを報告する。

<2010年度前期の授業（* = 持ち帰り課題）>

第1回 導入 グループワーク「良い文章」とは何か

第2回 トレーニング1「お知らせのメール」グループワーク

*第3回 トレーニング1「お知らせのメール」プレゼンテーション

「作文テスト」情報をテーマにした短いレポート

*第4回 トレーニング2「レストランのメニュー」

- *第5回 トレーニング7 「わかりやすいマニュアル」
- *第6回 トレーニング3 「問い合わせのメール」
- 第7回 トレーニング4 「注意書きやサービス案内」
- 第8回 前半の振り返り
- *第9回 トレーニング6 「お店やイベントの広告」
- 第10回 トレーニング8 「場所や交通の案内」
- *第11回 トレーニング5 「お願いのメール」
- 第12回 トレーニング9 「企画や提案を出す」企画書作成
- 第13回 トレーニング9 「企画や提案を出す」企画書の発表・投票・分析
- 第14回 アカデミック・ライティングの基礎
- 「作文テスト」情報をテーマにした短いレポート
- 第15回 達成度確認テスト

テキストに掲載されているトレーニングのうち、どのトレーニングをどのタイミングで取りあげるかは、ある程度講師の裁量に任されている。筆者のトレーニングの取りあげ順序とその意図については野田ほか（2010）で述べたため、ここでは詳細は割愛するが、前半を基礎編、後半を応用編と位置づけ、前半で練習したことをよりスムーズに生かせるよう意図している。

定着に関しては、全体を通じて、「形式的なルールとその機能・目的を考える」ことを学生に意識させるよう務めた。細かく具体的なルールを覚えることももちろん重要であるが、汎用性のある形で「文章を書くときの心がけ」を身につけることができれば、どのような状況であってもある程度基本を応用してその場にふさわしい形式のものが書けるようになると思ったからである。

例えば「メール」の授業であれば、書けるようになってほしいメールの形式を想定し、その形式の見本を具体的に示すことはもちろん、それを反復練習し、形式の項目（「件名」「宛名」など）ごとに「何のためにそれを書くのか」を説明するように心がけた。「件名」はメールを開く前に内容を予測させ、重要性を認識してもらうことや内容の確実な伝達のために必要である、といったことである。

また、毎回の授業でも同様のことを行った。基本的に1コマで1つのトレーニングを完結させ、毎回、そのテーマとなる文章の「機能」や「目的」を明確に伝えた。意識させるために、明文化して各トレーニングの具体的なポイントとともに板書した。例えば、「お知らせのメール」の目的は「受け手に確実に情報を伝えること」、「注意書き」の機能は「不特定多数の、情報を求めている人たちに対する注意を喚起すること」などといったことである。それに従って文章や紙面を作成する際に、本来の機能に立ち返って考えることができるように配慮した。

また、形式を機能・目的の面から見るという意識づけの実践練習として、プレゼンテーションを利用した。例年通り、グループで取り組んだ課題を口頭発表させ、その際、工夫した箇所とその理由、その工夫の結果どのように良くなったか、作成の際に特

に何を意識したか、全体を通じての「目的」を口に出させるようにした。さらに、細かい説明の後に、「この文章は、先生に対してお願いをきいてもらうという目的の文章なので、全体を通じて、丁寧にすることを意識しました」などというように、文章の目的とそれが達成できるようにするために取り組んだことを発表させるようにした。

基本的に「反復」「明示」という単純な方法ではあるが、繰り返し重要な点をインプットし、たとえあらかじめ自分たちで準備した原稿通りであるにせよ口にすることで、意識を高める効果はあるものと期待している。

2.2 持ち帰り課題の活用とその課題

授業内容が定着するということは、授業から離れたところで、自分が書く文章や読む文章に対して意識を向けることができるということである。そのためには、授業で扱うルールは、実際の生活の中で目にする文章にも生かされているということを感じ取る必要があると考えた。

そこで、持ち帰り課題を利用した。課題内容を、授業で扱ったことを授業内だけで完結させるのではなく、現実と照らし合わせることができるようなものにした。そうすることで、実際に目にする文章も、機能・目的という面から分析し、それを参考に自分の文章力を磨く力がつくことを期待した。

特に、トレーニング2「レストランのメニュー」と、トレーニング6「お店やイベントの広告」に関しては、実際のメニューや広告を見て、授業中に自分たちが作成したものどう違うか、実際のメニューや広告の、「何」が「何のために」「どのように」書かれているかという点で観察・記述させる問題とした。

その発展として、「企画書」の回では、それぞれ企画内容でもっとも「売れそうだな」と思うものに関して投票した後で、自分たちの作成した企画書とほかのグループが作成したものを比較し、内容的に足りないもののほかに、見やすさ・情報の伝わりやすさについてはどのような工夫をしたか、またすべきだったかを反省させ、授業内課題とした。

以上のような取り組みの効果については、現段階でははっきりとした形では見ることはできない。また、形式に関して、「どのように」「何のために」を説明したり考えたりすることは、重要ではあるが、実践的で具体的な練習に対して、やや抽象的で理屈っぽい。それゆえに、なかなかすべての学生にその意図を理解してもらうところまではいかなかったように思う。「メニュー」「広告」の持ち帰り課題でも、「字が大きく書いてある」「色が派手である」というところまでは指摘できても、それがどのような機能を果たしているかまでを論述できているのは、半数程度であった。メニューや広告は、身近ではあるが、学生自らが作成する機会はあまりないものである。その点では、より学生が必要を感じるような課題を選択するなど、改善の余地があると思われる。

2.3 第14回の作文テストの内容と評価結果

ここでは、前期14回目に実施した作文テストについて、人文学部の学生30名分の作文

を分析した結果を述べる。作文の分量は40分程度でB5用紙1枚、設問は「次の資料のいずれかひとつを参考にして、「情報」というテーマで短いレポートを書いてください」（文献からの資料とグラフの資料を併記）というものである。

問題文であえて「レポート」という言葉を使ったのは、後期の最終回の授業で同一の問題を使用し、再度作文テストを行う意図があるためである。後期はレポートの書き方として、資料を利用し、正しく引用することを指導する。そのため、その練習をする前と後でどれほど書き方の差があるかを学生に認識してもらうために、敢えてこのような問題文にした。

評価結果は表1のとおりである。以下、各項目に関して簡単に結果を分析する。

表1 2010年度 第14回授業時の作文課題の分析結果

第14回 (7月)	評価項目	評価段階					
		A	B	C	D	E	
形式	段落	11	6	5	4	4	
	文体	23	2	1	4		
	語彙・表現	3	5	13	9		
	文末表現	14	11	5			
	文	文法的誤りの有無	20	5	5		
		冗長さ・読みにくさをともなう文の有無	22	3	5		
	文字表記	16	5	7	2		
内容	構成	3	0	22	5		
	論拠	15	9	1	3	2	
	論理性	15	14	1			
集計人数 30							

・「段落」

…適切さに問題が残るものの、意識がない学生は少なく、その必要性は認識していることが読み取れる。

・「文体」

…直前に「アカデミック・ライティングの基礎」として、普通体で統一されたレポートの簡単な見本を示したこともあり、A評価が多くなった。

・「語彙・表現」

…レポートの書き方指導においてもっとも直接的な結果がしやすい項目といえるが、前期の段階では、どのような語彙・表現が書き言葉としてレポートにふさわしいのかを学生が判断するのは難しい。これらに関しては、後期、指導を重視すべき項目といえるだろう。

・「文末表現」

…これも直前のレポート見本の影響もあると思われるが、「思う」の使用や体言止めの使用が見られる程度で、比較的高い評価になった。

・「文」

…すぐに改善することが難しい項目であるが、今回の結果だけを見ると、読みにくい文を書いている学生数は全体の3分の1に満たず、基本的な力は身につけている学生が多いといえるだろう。

・「文字表記」

…形式名詞や接続詞のかな表記などについては、特に前期では扱わなかったため、B評価

以下の学生がやや高い割合となった。

・「構成」

…3部構成に関しては、本格的な指導をする前に完全なものを書くことはほぼ不可能であると思われる。しかし、これも直前のレポート見本が原因か、いわゆる3部構成として完全に整っていないとしても、章立てをしたり、背景説明から始めるなど、C評価「何らかの構成を意識している」が高くなった。

・「論拠」

…「客観的な内容」に対する「主観的な意見」という組合せは、資料を参考にして書くという設問もあり、「論拠」という意識はそれほどないだろうが、高い評価と言って良い結果となった。

・「論理性」

…なじみの薄い「レポート」という形式を意識するあまりに、時間内に内容をまとめきれず、「主張が明確でない」B評価の割合が高くなったものと思われる。

以上、各項目について簡単に分析した。本格的な指導もない段階で、資料を引用して文章を書くのは非常に難しい。引用したデータに対して考察するよりも、資料の文章に書かれている内容に大きく影響され、そこに書かれている意見をそのまま受け入れてしまう。反対に、文章を利用した「論拠」（データ+意見）はしっかりしたものが書きやすい。構成も比較的整えやすい。設問の仕方、テストのタイミングなど、その作文で何を測るのかを慎重に考え、実施することが重要であるといえる。

3. 実践報告（2） 担当講師：辻野あらと

3.1 授業の重視点とその意図

野田ほか（2010）にあるとおり、2009年度に筆者が担当した「文章表現Ⅰ」の授業では、よい文章を書くためのポイントの理解を促すという一定の成果はみてとれた。しかし、形式面での定着に課題が残り、根拠を明示して意見を述べることが習慣となるほどには学習内容の定着が図れていないことがわかった。また、文章表現に欠かせない見直しや書き直しなど、自己修正を重ねる点についても課題が残った。

これに基づき、筆者が担当した同年後期の「文章表現Ⅱ」の授業では、論文レポートの作成課題を通じて、形式面の定着と根拠を明示して意見を述べることに重点をおいた指導をおこなった。この結果、形式面での定着が3回の授業でほぼ達成された¹。一方で、根拠を明示して意見を述べることが概ね習慣化できたといえるまでに11回の授業を要した²。形式面での定着が比較的短期間に果たされた反面、事実に基づいた分析や考察をすることの定着の難しさが課題として残った。

これを受けて、2010年度の筆者の担当する「文章表現Ⅰ」の授業では、形式面と事実に基づいた分析や考察をする力の定着に焦点をあてることとした。技能の定着というある高度な情報処理を自動化させることを目的とする以上、単に何度も型を繰り返し練習

するだけでは不十分である。熟達者のチャンクの形成と技能の自動化³に見られるような観点での能力の向上を図るため、学生の取り組み課題に戦略的な観点を取り入れ、成功と失敗を繰り返させながら学習内容の定着を促すことが重要であると考えた。

また、アカデミック・ライティングに基づいた作文評価を指導の軸として用いたが、文章を書くことに慣れ親しむという授業の重要な目標も考慮に入れた。学生に負荷と時間のかかる語彙表現や冗長さ、構成、論拠といった項目の指導は、アカデミック・ライティングを重視した後期の「文章表現Ⅱ」で取り上げることとし、グループワークによる学生の気づきを中心に授業を進めた。

このような方針に基づき、また筆者の特性や指導力を考慮に入れ、「文章表現Ⅰ」の担当者間共通のカリキュラムの範囲内での構造化を図った。

以下、授業の流れと、授業内容を定着させるために実践したことを報告する。

<2010年度前期の授業の流れ>

- 第1回 導入 文章表現の基礎 「作文テスト」「大学生にとってのアルバイト」
- 第2回 トレーニング1 「お知らせのメール」
- 第3回 トレーニング2 「レストランのメニュー」
- 第4回 トレーニング3 「問い合わせのメール」
- 第5回 トレーニング5 「お願いのメール」
- 第6回 トレーニング6 「お店やイベントの広告」
- 第7回 トレーニング8 「場所や交通の案内」
- 第8回 前半のふり返り 作文課題「プレゼンテーションにおいて重要なこと」
- 第9回 トレーニング9 「企画や提案を出す」企画とは何か
- 第10回 トレーニング9 「企画や提案を出す」企画の立て方
- 第11回 トレーニング9 「企画や提案を出す」企画書の書き方・企画の発表
- 第12回 アカデミック・ライティングの基礎
- 第13回 作文課題のフィードバック トレーニング7 「わかりやすいマニュアル」
- 第14回 「作文テスト」「大学生にとってのアルバイト」
- 第15回 到達度確認テスト

前期の授業の流れの構造は、①作文テストを初回と終盤の回におこなうこと、②前半のテキストの各トレーニングを通して文章を書く姿勢を取り上げること、③後半に構造化されたまとまりのある課題を設定すること、④前半のふり返りとして作文課題を設け到達度を測ること、⑤後半に情緒的な作文を書かせること、の5点を意識したものとなっている。

①の作文テストによって、この授業を通しての取り組み成果を可視化すると同時に、筆者が学生の文章表現能力の向上の度合いを測定した。第1回と第14回の授業時に「大学生にとってのアルバイト」というテーマで作文を書かせた。第14回の授業の作文テスト後に、第1回の学生自身が書いた作文と比較させた。野田ほか（2010）においてこの作文

課題の活用とその効果に触れたため、本稿ではこの詳細な報告は省くが、2010年度も同様に学生の自分自身の文章表現能力の向上の実感のために一定の役割を果たせたと考えている。

②で意識した文章を書く姿勢には、相手意識やレイアウト・視覚情報の活用、状況の認識・TPO、礼儀やマナーなどが含まれる。例年の傾向では、入学したばかりの学生はこれらの要素についての理解が乏しいため、毎回明確な目標を設定した上でグループワークやプレゼンテーションによって具体的な作業を進めつつ、これらの意識づけを図った。

具体的には、第2回の「お知らせのメール」のグループワークにおいて、不適切なお知らせメールを受け取ったときの立場からメールの書きなおし作業をおこなった。その修正版のメールについてのプレゼンテーションでは、相手意識の重要性について述べられることが中心となった。それ以降も同様に、第3回では「レイアウト・視覚情報の活用」、第4回は「より多様な相手の状況を想定した相手意識」、第5回では「状況認識・TPOと礼儀」、第6回では「不特定多数の人を想定した相手意識とレイアウト・視覚情報の活用」、第7回ではそれまでの学びを総合した「わかりやすい文章」の意識づけを目標として設定した。

③では、トレーニング9の「企画や提案を出す」を掘り下げて扱い、構造化したり戦略的にとらえたりして文章を書くことについての理解を促した。この具体的な内容については後述する。

④では、前期の中盤までの段階で重点的に形式面を取り上げ、前半の学びについての理解度を測ろうと考えた。先述した2009年度後期の「文章表現Ⅱ」の授業において形式面での定着が早い段階で習得できたことと、同年度の「文章表現Ⅰ」の授業中の発表や課題の評価でも形式面での評価が前期の中盤以降は大きな問題とならなかったためである。形式面での理解は早期に形成されるが定着には困難さがあるという仮説の検証を試みた。

具体的には、授業中に文章の形式面について考えさせる時間を設け、毎回の授業から学んだことをまとめさせた。第2回から第6回までに学んだことを第7回の授業でまとめ、第8回ではグループワークなどの授業中の活動の意義についても考えさせた⁴。そして、授業の後半に「プレゼンテーションにおいて重要なこと」というタイトルで作文を書かせ、前半の評価とした。これについては後述する。

⑤では、④で明らかになった形式面の成果をふまえ、その定着にむけた取り組みをおこなった。具体的には、「理想の友達とは」という主観的で情緒的な作文を書かせた。このような趣旨の異なった課題では、学生はそれまでの授業で培った論理性や客観性のある文章表現のポイントをうまく活用することができない。したがって、形式や論理性、わかりやすさなどを意識した不自然な文章を書く学生も多かった。

これまで文章表現能力の定着が図れなかった大きな原因として、日常的な阻害要因への対策が十分におこなえていなかったことがある。つまり、友人とのメールなどの日常の文章表現も大切にしながら、大学のレポートや課題などの文章においては形式的かつ

論理的な側面での能力の向上を活かすという構図を意識した働きかけが不足していたのである。したがって、主観的で情緒的な文章を書かせるという干渉課題を設定することにより、それまで習得した文章表現の技能が揺れ、この揺れるという事実をふまえてその後の取り組みをおこなうことで定着の意識を高めようとした。

3.2 前期中盤での作文課題と分析

2010年度の「文章表現Ⅰ」の授業で取り扱った課題の授業中の発表や課題の評価において、「相手に配慮する」「礼儀をわきまえる」「視覚情報を活用する」「見やすくする」といった基礎的な観点は、前期の中盤にはほぼ習得されていると判断できた。そこで、第8回の前半のふり返りの時間に作文課題をおこない、その確認を試みた。

表2 2010年度 第8回授業時の作文課題の分析結果

第8回 (6月)	評価項目	評価段階					
		A	B	C	D	E	
形式	段落	16	10	0	4	0	
	文体	19	5	4	2	/	
	語彙・表現	9	14	7	0	/	
	文末表現	27	1	2	/	/	
	文	文法的誤りの有無	11	16	3	/	/
		冗長さ・読みにくさをともなう文の有無	20	8	1	/	/
	文字表記	14	9	6	1	/	
内容	構成	23	3	4	0	/	
	論拠	18	8	2	2	0	
	論理性	19	7	4	/	/	
集計人数 30							

表2は第8回授業時の作文課題「プレゼンテーションにおいて重要なこと」の担当講師による分析結果である。

この結果より、「形式」の「段落」「文体」「文末表現」「冗長さ・読みにくさをともなう文の有無」、「内容」の「構成」「論拠」「論理性」においては高い評価となっていることがわかる。

表3 2009年度 作文課題の分析結果

第12回 (7月)	評価項目	評価段階					
		A	B	C	D	E	
形式	段落	14	8	4	5	0	
	文体	26	1	1	3	/	
	語彙・表現	8	13	10	0	/	
	文末表現	10	9	12	/	/	
	文	文法的誤りの有無	23	8	0	/	/
		冗長さ・読みにくさをともなう文の有無	27	4	0	/	/
	文字表記	19	0	10	2	/	
内容	構成	2	12	17	0	/	
	論拠	19	12	0	0	0	
	論理性	27	4	0	/	/	
集計人数 31							

表3は2009年度の作文課題の分析結果を示したものである。これを表2と比較すると、「形式」の「語彙・表現」「文法的誤りの有無」「冗長さ・読みにくさをともなう文の有無」においてほぼ類似する結果が出ている⁵。

「形式」の「段落」「文末表現」「文字表

記」と「内容」の「構成」については、2009年度と比較して顕著な伸びがみられた⁶。一方で、「形式」の「文体」、「内容」の「論拠」「論理性」については2009年度よりも低い結果となった。

これは2009年度の課題をふまえた取り組みによる成果である。具体的には、文末表現の統一を第4回の授業以降の課題の必須事項と定めた。10%落ち込んだ「文法的誤りの有無」については、ねじれ文など文法的な指導を取り立てておこなう機会を持たなかったことが主な要因であると考えられる。同じく課題であった「語彙・表現」については、2009年度と同様に、難しい表現を使おうという、いわば背伸びのような意図が読み取れる箇所が多かった。これはよい文章が書けるようになる過渡期や前段階として捉えることができる。

2010年度前期の前半までの時点で、2009年度の前期末の時点の文章とほぼ同程度の水準が達成できた。しかし、これが即座に大きな成果をあげたということにはならない。例年では、前期末に評価の高い文章を書くことのできた学生に夏期休暇明けの後期の最初の授業で文章を書かせると、ほぼすべての部分において評価が著しく低下していた。文章を書くうえでの重要な点について理解を促すことのみでは、技能としての定着を図ることが難しいと考えられる。「文章表現Ⅰ」の授業の重要な目標の一つに学生が文章自体に親しみを持つことがある。文章を書くことの意義を強く実感でき、また親しみを持てるような活動によって技能の定着を図る必要があると考えられる。

3.3 企画書の作成を通じた定着への取り組み

アカデミック・ライティングにおいては、序論・本論・結論という構成や論拠が重視されることは言うまでもない。「文章表現Ⅰ」の授業では、これらのポイントをおさえる指導を共通認識のもとにおこなってきた。また、文章全般に対する学生の意識が高まることを狙い、メールなどの日常的な文章とアカデミック・ライティングは基本部分において共通していることを意識して授業をおこなっている。

この基本部分が共通していることをより明確に意識できるように、筆者の担当するクラスでは、『日本語を書くトレーニング』のトレーニング9「企画書の作成」というテーマに3時間をかけ、根拠や必然性をもって文章を書く練習をおこなった。「企画とは何か」「企画の立て方」「企画書の書き方」について学習し、企画にふさわしいプレゼンテーションを構成する課題を設定した。野田ほか（2010）は今後の一つの課題として「自分の文章を推敲したり、ほかの人の文章を注意深く読んだりする姿勢を定着させること」をあげている。この「企画書の作成」の授業では、グループワークにおいて一つひとつの情報をチェックし、グループの企画内容を見直し、魅力ある商品やイベントを構成していった。それを3回目の時間にまとめ、プレゼンテーションをおこなった。

以下、この3回の授業の概要について述べる。

3.3.1 「企画とは何か」

「企画とは何か」の授業では、企画を始めるうえでの基本的な考え方の習得とその

活用の練習をすることを目標とし、グループで企画内容を考える活動をおこなった。

この時間の冒頭で、企画とは新しい価値を創造するための計画であると説明した。これを、①すでにある商品やイベントを改良する、②全く新しいビジョンを描いて商品やイベントを発明する、のいずれかによって達成しようと呼びかけた⁷。また、学生の柔軟な発想を促すために、世の中にある様々な問題を見つけ、それを身近なものを使って解決するというスタンフォード大学のイノベーション・トーナメント⁸の簡単な紹介をした。同年齢の工夫に満ちた学生の取り組みを紹介することにより、学生の意欲や興味関心の喚起を試みた。

学生たちはグループで「今考えられる問題は何か」「それをどのように解決できるか」ということについて考え、グループごとに企画内容の検討をおこなった。以下、代表的な企画内容を紹介する。

【着せ替えシミュレーションパネル】

服を選ぶ時間を短縮してくれる着せ替えシミュレーションパネル

【自動メイクマシーン】

メイクが苦手な人も短時間できれいにメイクしてくれるマシーン

【痩せるコンビニ】

メタボ対策をするコンビニ

3.3.2 「企画の立て方」

「企画の立て方」の授業では、企画の立てる際の重要な項目についての基礎知識の習得とその活用の練習をすることを目標とし、グループで企画内容の精査をおこなった。

この時間の冒頭で、企画とは新しい取り組みであり、常にリスクがつきまとうものであることを説明した。「誰が、いつ、どこで、どのように、何を、いくらで」といったような基礎的な点をおさえ、強みと弱みを浮き彫りにし、リスクへの対策を講じる手立てを考えさせた。

以下、各グループが考えたそれぞれの企画の主なリスクと対策である。

【着せ替えシミュレーションパネル】

<リスク>

- ・女性を中心に実際に試着したい人が多いため利用されないかもしれない。
- ・多数の人と同じようなセレクションになってしまうかもしれない。
- ・サイズや年齢などの登録や設定に時間がかかってしまうかもしれない。

<対策>

- ・実用的で安価な商品を扱う店に設置する。
- ・売れ筋商品を買う客が多いため、実用的で安価な商品を扱う店に設置して、選択肢をいくつか設ければ問題ない。
- ・体格や好みを登録したカードを認証するシステムにする。

【自動メイクマシーン】

<リスク>

- ・人の多いところで使うのは恥ずかしい。
- ・微調整がきかないのではないだろうか。
- ・人と同じメイクになってしまうのではないだろうか。

<対策>

- ・デパートやモールの化粧室内に設置する。
- ・微調整用のキットをつけておく。
- ・顔の骨格を認証するようにして好みのパターンからメイクを選べるようにもする。

【痩せるコンビニ】

<リスク>

- ・商品に魅力がなく誰も来なくてつぶれること。
- ・メタボの人が自主的に行くと思えないので存在意義がわからない。
- ・痩せなかったら苦情が来る。

<対策>

- ・オフィス街に設置する。
- ・近隣の企業に、社員をメタボ対策することによって働く効率が上がることを説明し、スポンサーになってもらい、社員食堂として認定してもらう。
- ・痩せることは約束ではないという注意書きをしておく。

3.3.3 「企画書の書き方」

「企画書の書き方」の授業では、テキストのトレーニング9「企画や提案を出す」を用い、企画書の書き方の練習をおこなった。その後、グループごとに企画書の作成と発表をおこなった。

発表では、企画の売り込みを意識した工夫を促した。「着せ替えシミュレーションパネル」のグループは、実用的で安価なものを扱う量販店だからこそ見落としがちな「意外とよい商品」の発見にも役立つとして、情報処理能力という利点をアピールした。また、その場で注文し、レジで支払いを済ませて商品を受け取ることができるという利便性も強調した。

「自動メイクマシン」のグループは、女性がメイクを煩わしく感じているという実態調査をおこなったと仮定し、さらに不景気によって化粧品のバリエーションをそるえるコストの問題を指摘した。パーティに行くのは年に数回だけだったり、営業先によってメイクを分けたりする際に手軽に使えるのであれば利用客は多いはずだとアピールした。

「痩せるコンビニ」のグループは、メタボという社会問題を解決することができれば全ての人にとってよいはずだとアピールした。近隣の企業を説得し、従業員の働く効率を高めることと、医療費の負担や病気による欠員を防ぐ効果もあるとした。さらに「環境にやさしい」だけでなく「人にやさしい」企業イメージをアピールできると

強調した。

3.4 文章表現を使い分けることの意識づけ

筆者の担当する「文章表現Ⅰ」のクラスでは、第12回の授業の前半にアカデミック・ライティングの基礎について学習し、その後「理想の友達」というテーマで作文をさせた。書き方を自由とし、学生の書きたいように書かせることで、主観的で情緒的な作文が多数みられた。ペア・ワークで文章評価をさせた際には、学生がそれまで慣れ親しんだ表現で書いた等身大の文章を称賛する声が多く聞かれた。さらに、授業終了時に、この授業を通じて以前よりも具体的でわかりやすい文章を書けるようになったという感想を書いた学生も多数いた。

ここで情緒的な作文を書いたことによって、論理的な文章を書くために学んだポイントが揺れ、第13回のトレーニング7「マニュアルの作成」では多くの口語表現が学生の文章にみられた。学生の相互評価においても、それを修正すべきとして指摘した学生は半数に満たなかった。

このような干渉課題によって学生の授業での学びが容易に揺らぐことがわかった。

3.5 第14回の作文テストの内容と評価結果

ここでは第14回の授業でおこなった「大学生にとってのアルバイト」という作文の評価について述べる。表4は2010年度の作文課題の分析結果である。

前期中盤の作文課題の分析結果である表2と比較すると「形式」の「文法的誤りの有無」、「内容」の「論理性」以外のすべての項目において明らかな落ち込みがみえる。

特に「形式」の「語彙・表現」と「文末表現」は落ち込みが著しい。さらに「内容」の「論拠」についても大きく落ち込んだ。根拠となる事実の提示が少なく、「思う」「思った」という文末表現が多く見受けられた。これは干渉課題として書かせた「理想

表4 2010年度 作文課題の分析結果

第14回 (7月)	評価項目	評価段階					
		A	B	C	D	E	
形式	段落	12	4	4	8	2	
	文体	11	1	1	17		
	語彙・表現	1	1	5	23		
	文末表現	0	2	28			
	文	文法的誤りの有無	9	13	8		
		冗長さ・読みにくさをともなう文の有無	13	14	3		
	文字表記	9	0	18	3		
内容	構成	18	3	9	0		
	論拠	9	2	15	4	0	
	論理性	20	8	2			
集計人数		30					

の友達」という作文が大きく影響していることが考えられる。

この作文と第1回の授業時に書いた同じ内容の作文の学生による比較では、「自分の文章がよくなったことに驚いた」という趣旨の感想が多数みられた。一方で、前期中盤に書いた「プレゼンテーションにおいて重要なこと」という作文との比

較からは、主に「形式」の「段落」「文体」「語彙・表現」「文末表現」、「内容」の「構成」の重要性を再認識したとする学生が多かった。

この作文課題の分析と比較によって、学生自身によって文章力の伸びを認識することができ、そして定着の危うさについての認識を促し、文章表現を使い分ける意識を確認することもできた。また、ほとんどすべての学生が第14回の授業時に書いた文章に対しても多くの修正点をあげた。自らの文章に対して批判的な目を向けて修正する姿勢の強まりと、文章表現を使い分ける意識がうかがえ、後期のアカデミック・ライティングの授業の必要性を認識する土台を形成できたと考えている。

4. おわりに

以上、「文章表現 I」における授業内容定着をめざす試みについて述べた。

この授業では、複数の講師が共通のテキストを用い、指導内容や到達目標も共通した認識を持っている。そのような状況の中、それぞれの講師が、さまざまな観点からテキストの生かし方を考え、より効果的な授業をめざし、また、内容の定着を図っている。これらの取り組みの積み重ねを、今後の授業に反映させていきたい。

注

- 1 レポートの書き方に関する文章表現課題において「段落」「文体」「語彙・表現」「文末表現」「文法的誤りの有無」「冗長さ・読みにくさをとまなう文の有無」「文字表記」の学生の達成度がすべて B 評価以上となった。B 評価とは不適切な部分が 1 か所あった場合の評価である。
- 2 学生が授業終了時のグループワークの評価において事実に基づいて発言することの重要性を指摘したのが 2 回目の授業であり、それをルール化したのが 5 回目の授業であった。「全員が事実に基づいた指摘や発言をしていたか」の項がすべて B 評価以上となったのが 11 回目の授業時であった。12 回目の授業時も同様となり、13 回目以降は個人作業日であったためグループワークはおこなわなかった。なお、ここでの B 評価は A ～ E までの 5 段階中、A「全くその通り」に続く「概ねその通り」にあたる。
- 3 代表的なものに、波多野（1996）がある。波多野らは珠算技能のレベルが一級以上の高校生に実際に算盤を使っての計算および算盤なしの暗算をさせたが、その際に、a) 事実に関するいくつかの質問をする言語的干渉課題、b) 簡単な計算をさせる計算干渉課題、c) 指を動かすことを禁止するあるいは強制的に指を動かすことを求める運動的干渉課題を課し、それらの干渉課題が計算にどのような妨害効果を持つかを調べた。実験の結果、①上級者では算盤計算より暗算のほうが速く、運動的干渉課題による妨害も受けない、②計算干渉課題は多少の妨害効果を持つものの言語的干渉課題は算盤計算をなんら妨害しない、ということが明らかになった。熟達者の算盤操作技術が高度に自動化していることがうかがえる。」
- 4 このうちグループワークの意義については野田ほか（2010）にまとめた。
- 5 A 評価と B 評価の合計数の差が ± 10% を類似しているとした。
- 6 A 評価と B 評価の合計数の差が 15 ポイント以上上回ったものを顕著な伸びとした。
- 7 これについては P.F. ドラッカー、上田淳生訳（2000）「出発点としてはたがいに補完関係にある二つの方法がある。第一に、経済や社会の断絶の発生と、そのもたらす影響との間の時間的な差を発見し、利用することである。すなわち、すでに起こった未来を予期することである。第二に、ビジョンを実現すること、すなわち自ら未来を発生させることである。」を参考に平易な言葉を用いて説明した。
- 8 ティナ・シーリグなどによるグループワーク形式の授業。たとえば「5 ドルを元手に一定期間内にどれだけ増やせるか」という課題を学生に取り組ませ、多数の斬新なアイデアを生み出させるという一連の活動のこと。

参考文献

- ・波多野諄余夫（1996）『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会
- ・野田春美・岡村裕美・坂本智香・高橋博美・建石始・辻野けんま・中崎崇（2008）「作文テストによる文章表現応力の測定－大学1年次生に対する教育効果の分析－」『人文学部紀要』28、pp.21-41、神戸学院大学人文学部
- ・野田春美・岡村裕美・辻野あらと（2010）「『文章表現』の授業内容の定着をめざして－『日本語を書くトレーニング』とアカデミック・ライティング指導の関連づけ－」『人文学部紀要』30、pp.23-44、神戸学院大学人文学部
- ・野田尚史・森口稔（2003）『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房
- ・P.F.ドラッカー、上田淳生訳（2000）『チェンジ・リーダーの条件－みずから変化をつくりだせ！』ダイヤモンド社
- ・ティナ・シーリグ、高遠裕子訳（2010）『20歳のときに知っておきたかったこと』阪急コミュニケーションズ